

中国人の目から見た近代中日文化交流年表

作成 王 曉 秋
訳注 飛 田 良 文
江 源
村 田 和 美
川 副 悠 史

1. 近代中日文化交流史年表を翻訳する意義

2005年11月15-20日、私は北京大学と北京市の共催する国際学会「北京論壇」に招かれて、北京を訪れた。そのおり、教え子の孫建軍（北京大学外国語学院講師、現在は副教授）に案内されて、北京大学図書館と構内を見学した。たまたま、学内の売店（日本の大学では生活協同組合の経営するものと同じ）に立ち寄ると書店がいくつかあり、研究書をみているうちに、王曉秋著『近代中日文化交流史』（中華書局出版発行、2000年）が目にとまった。早速購入して、帰って読むと、最後に「近代中日文化交流大事年表」があり、それは中国人の立場からみた交流年表であった。日本人の目から見た日中交流史、いいかえれば日本史の教科書にある知識とは異なるものがあり、興味をひかれた。日本では孫文であるが、中国では孫中山で通用しているとか、同一事件が日中で別名になっていたりする。日本人の著書の書名も中国語訳されていて日本書名がわからないという不便のあることが分かった。

日本文化は、日本列島の成立以来、朝鮮・中国文化の移入にはじまり、室町時代にはポルトガル文化、オランダ文化に接し、江戸期にはアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアの文化に接して、今日に至っている。一方、中国(清)はアヘン戦争から西洋諸国と接し、その軍事力に屈した。その姿に日本もまた恐れを抱き、開国へと進んでいく。

日本の近代化は、中国へ渡った欧米人宣教師の漢訳した文献が徳川吉宗の時代から公式に日本に輸入されて、開国への準備となる。一方、明治維新後は、日本が中国(清)の手本となり、孫文は日本に亡命し、魯迅、郭沫若、周恩来などの多くの中国人留学生が日本にやってくる。亡命者を助けた日本人、留学生を受け入れた教育施設、そこで行われた日本語教育へと発展する。この年表は、こうしたアヘン戦争以降の日本と中国との人物・著書・翻訳書などの交流を知るための基本資料となると考えて、翻訳を試みた。

この年表の特色は、(1) 歴史的事件、(2) 人物の交流、(3) その人たちの著作物から構成されている。この年表（近代）の下位区分はされていないが、この三つの視点から分類すると三期に分けられる。

①前期 アヘン戦争から中日修好条約 (1871) まで

②中期 中日修好条約から下関条約 (1895) まで

③後期 下関条約以降

①前期は、中国の情報が日本へ導入される時期で、著作物が日本へ輸入される。文化の方向が中国→日本へ向いている。たとえば、1840 年のアヘン戦争の情報が中国人の周蔭亭によって日本に入り、日本人の塩谷宕陰はアヘン戦争に関する資料を編集して 1847 年『阿芙蓉彙聞』を執筆する。1842 年、魏源の『聖武記』が中国で出版されると翌年には日本に輸入され、1842 年に出版された『海国図志』も 1851 年には日本に輸入される。1854 年には、箕作阮甫と塩谷宕陰が訓点を付けた『翻刻海国図志』が刊行されるといった調子である。

②中期になると、中日修好条約が結ばれ中日両国は正式な外交関係を結ぶ。明治 4 年（同治 10 年、1871 年）8 月のことである。1877 年には初代駐日公使何如璋が公使館員を率いて日本に着任し、1878 年には中日の知識人が詩会を開催する。1879 年には王韜が訪日し『扶桑遊記』を執筆する。こうした詩会や訪日中国人の著作が続々と出版される。

③後期は日清戦争の終結 (1895) からで、文化の方向が日本→中国となる。孫文が日本に亡命してくる。1898 年には康有為と梁啓超も日本に亡命してくる。1896 年には第一回公費留学生として 13 名が日本に留学してくる。1903 年には留学生が 1,000 名に達し、1905 年には 8,000 名に達したという。そのための教育施設が早稲田大学、法政大学、実践女学校などに設置され、また、そこに入学するための日本語を教える予備校も設立された。逆に中国にも学校が設立され、中国へ赴任した日本人教師も 1905 年には 500 人を越したという。こうした人間の交流が日本語教師の養成を必要とし、教科書、辞書が作成される。その結果、中国語と日本語の語彙の交流、いいかえれば借用が交互に行われた。①前期、②中期は中国→日本へ、③後期は日本→中国への借用が行われた。

語彙交流史の観点からは、①前期については佐藤亨、飛田良文、沈国威、陳力衛、朱京偉、孫建軍などの研究があるが、②中期、③後期については、これからである。朱京偉、陳力衛、沈国威などが研究を開始したばかりである。以上のように、この年表は、近代中日交流史に役立つだけでなく、日中語彙交流史、日本語教育史の資料としても、大きな示唆を与えてくれるのである。

翻訳にあたっては、日本人の立場から理解できるように注と解説を加えた。2007 年 4 月から、明海大学大学院の私の授業に出席していた江源（日本語学専攻・現在は明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程）と村田和美（中国語専攻・現在は広島大学大学院総合科学研究科非常勤講師）とをさそって、翻訳をはじめた。2008 年 3 月にはほぼ完成したが、人物は読み方が、文献については執筆完了なのか、刊行年なのか判断できないものが残った。そこで、日本統治下の台湾史が専門で、国際基督教大学大学院で私の授業に出席していた川副悠史（現在は国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程）に確認と修正を依頼した。夏休み前に作業は終了したが、なお、未確定のものが若干残った。そこで、夏休み

を利用して江源に問題点を調査してもらい、さらに川副悠史が歴史的な事項について再度確認・訂正し、解説を加え、飛田が校閲して訳注を完了した。翻訳についての原著者との了解と原著者紹介の執筆は、孫建軍に依頼した。また、国際基督教大学図書館のレファレンスサービスセンターには、いろいろとお世話になった。ここに経緯を記して感謝の意を表する。

2008.9.30

飛田良文

王晓秋教授の紹介（孫建軍執筆）

王晓秋（オウギョウシュウ、Wang Xiaoqiu）、1942年8月生まれ。1964年北京大學卒業後、同歴史学部にて教鞭を取る。現在、北京大學歴史学部教授、北京大學中外関係史研究所長を務める。中国全国政治協商委員会文史資料委員会委員、中国国家清史編纂委員会委員、中国中外関係史学会副会長、中国中日関係史学会副会長、北京中日文化交流史研究会会長を兼任。中日歴史共同研究中国側委員。第9期、10期、11期中国人民政治協商会議全国委員会委員（参議院代議士相当）に3選。専門は中国近代史、中日関係史及び中外文化交流史。アメリカ、フランス、日本、韓国、タイ、台湾、香港などの大学や研究機関と学術交流を積極的に展開。日本では、東京大学、慶応大学、国際日本文化研究センターなどに訪問研究員や客員教授として招聘される。

近年の主な著書に、

『黄遵憲与近代中日文化交流』（遼寧師範大学出版社、2007年）

『近代中国与日本—互動与影響』（崑崙出版社、2005年）

『晚清中国人走向世界的一次盛举：1887年海外遊歴使研究』（遼寧師範大学出版社、2004年）

『近代中国与日本—互動与比較』（紫禁城出版社、2003年）

『近代中日文化交流史』（改訂版、中華書局、2000年、初版1992年）

『戊戌維新与近代中国改革』（編者、中国社会科学文献出版社、2000年）

などがある。1987年より現在まで、専門著書は20冊を超える。出版活動は中国国内のみでなく、日本や韓国などに及ぶ。『近代中日啓示録』（北京出版社、1987年）は部分訳され、『アヘン戦争から辛亥革命：日本人の中国観と中国人の日本観』（東方書店、1991年）に書名を変え、発行されている。『中日文化交流史話』（商務印書館、1996年）も日本語版（日本エディタースクール出版部、2000年）がある。韓国語著作に『近代中国与日本—他山之石』（高麗大学校出版社、2002年）が挙げられる。1995年から1998年にかけて発行された『日中文化交流史叢書』（中西進・周一良編集代表）において、『歴史卷』（大庭脩・王晓秋共編、大修館、1995年）の中国側編集者を務める。著書のほか、学術論文200篇以上を数える。『近代中日啓示録』は中国通俗政治理論読物一等賞などを受賞。その他受賞多数。

2. 中国人の目から見た近代中日文化交流年表（訳注）

凡 例

- 1 王晓秋著『近代中日文化交流史』（北京：中華書局、2000年）の付録「近代中日文化交流大事年表」を翻訳した。
- 2 翻訳にあたっては、次の点に注意した。
 - ① 人名の読み方は、中国人はカタカナ、日本人はひらがなとし、（ ）内に示す。
 - ② 書名の執筆時期と刊行年は、区別することにした。そのための参考文献は解説の末尾に示す。
 - ③ 年表の「この年」は、その年の月を特定できないことを示す。
- 3 訳者の註記には〔 〕内と脚註との二種類がある。
- 4 ＊印がついている事項や人物は、脚註とは別に年表末に項目を設けて解説する。
- 5 年表および年表末の解説には、「漢文」という言葉が使われているが、時代や用例によって、それが指し示す内容は様でない。外交交渉に用いた北京官話や漢詩から、口語や和製漢語の影響を受けて清末に用いられた新民体、音声で意思疎通を行う代わりに用いられた筆談まで、多様な事例を含む。

| | | |
|-------|--|--------------|
| 1840年 | 中国道光二十年 | 日本天保十一年 |
| 6月 | イギリス艦隊が中国の珠江口を封鎖し、アヘン戦争が勃発した。 | |
| 7月 | 日本との中国貿易の船主である周藹亭（シュウアイテイ）が、幕府にアヘン戦争についての最初の情報を記した風説書を提出した。 | |
| 1842年 | 中国道光二十二年 | 日本天保十四年 |
| 6月 | イギリス軍は上海の呉淞口を占領し、江南提督の陳化成（チンカセイ）は清国に殉じて戦死した。 | |
| 8月 | 清国とイギリスが「南京条約」に調印し、アヘン戦争が終結した。 | |
| 12月 | 松代藩士の佐久間象山（さくましょうざん）が『海防八策』を藩主に提出した。 | |
| この年 | 魏源（ギゲン）編著の『海国図志』五十巻と『聖武記』十四巻が中国で出版された。 | |
| 1844年 | 中国道光二十四年 | 日本天保十五年、弘化元年 |
| 12月 | 中国人貿易船主の周藹亭（シュウアイテイ）らが長崎奉行に『英国侵犯事略』を提出した。 | |
| この年 | 魏源（ギゲン）の『聖武記』が日本に輸入された。 | |
| 1846年 | 中国道光二十六年 | 日本弘化三年 |
| この年 | アヘン戦争に関する詩集『乍浦集咏』が刊行され、同年日本に輸入されて翻刻された。 | |
| 1847年 | 中国道光二十七年 | 日本弘化四年 |
| この年 | 魏源（ギゲン）が『海国図志』を増訂し、六十巻本とした。 塩谷宕陰（しおのやとういん）がアヘン戦争に関する風説書やその他の資料を編輯し、『阿芙蓉彙聞』を執筆した ¹⁾ 。 | |
| 1849年 | 中国道光二十九年 | 日本嘉永二年 |
| この年 | アヘン戦争を描いた日本の小説『海外新話』[烏有生（うゆうせい）著]と『海外新話拾遺』[種葉翁（しゅさいおう）著]が刊行された。 | |
| 1850年 | 中国道光三十年 | 日本嘉永三年 |
| この年 | 徐繼畲（ジョケイヨ）著『瀛環志略』十巻が中国で出版された ²⁾ 。 『聖武記採要』の訓点本が日本で刊行された。 | |
| 1851年 | 中国咸豊元年 | 日本嘉永四年 |

- 1) 市古貞次・久保田淳編『日本文学大年表（新版）』おうふう、2004年。
- 2) 瀋渭濱主編『中国歴史大事年表・近代巻』上海辞書出版社、1999年。

| | | |
|-------|---|-------------|
| 1月 | 拝上帝会 ³⁾ が広西省桂平県金田村で蜂起し、国号を太平天国と称して反乱を起こした。 | |
| この年 | 魏源（ギゲン）の『海国図志』が初めて日本に輸入された。 | |
| 1852年 | 中国咸豊二年 | 日本嘉永五年 |
| 冬 | 日本に來航した中国船主が、江戸幕府に太平天国に関する情報の提供を開始した。 | |
| この年 | 魏源（ギゲン）が『海国図志』を増訂し、百巻本とした。 | |
| 1853年 | 中国咸豊三年 | 日本嘉永六年 |
| 3月 | 太平天国軍が南京を占領した。 | |
| 7月 | アメリカ海軍の准将ペリーが艦隊を率いて初めて日本の浦賀港〔神奈川県〕に入港した。 | |
| この年 | 栄力丸*の日本漂流民文太（ぶんた）らが香港から上海に移り、1854年7月に日本に帰国した。 | |
| 1854年 | 中国咸豊四年 | 日本嘉永七年、安政元年 |
| 2月 | ペリーはアメリカ艦隊を率いて再び江戸湾に入港し、清国の羅森（ラシン）*はペリー艦隊に〔漢文通訳として〕随行し、日本に赴いた。 | |
| 3月 | 日本とアメリカが「日米和親条約」〔「神奈川条約」〕を結んだ。 | |
| 4月 | 吉田松陰（よしだしょういん）がアメリカ艦隊に密航を求め捕縛された*。彼の師佐久間象山（さくましようざん）も巻き込まれて捕縛された。獄中で佐久間象山は『省咎録』を、吉田松陰は『幽囚録』を執筆した。 | |
| 11月 | 羅森（ラシン）が帰国後、香港の月刊誌『遐迩貫珍』に『日本日記』の連載を開始した。 | |
| この年 | 日本では太平天国を題材とした小説『雲南新話』、『外邦太平記』などが出版された。 箕作阮甫（みつくりげんぽ）、塩谷宕陰（しおのやとういん）が訓点した『翻刻海国図志』が刊行された。 | |
| 1855年 | 中国咸豊五年 | 日本安政二年 |
| 春 | 吉田松陰（よしだしょういん）が獄中で羅森（ラシン）の『南京紀事』を日本語に訳し、『清国咸豊乱記』と名付けた。 | |
| 1856年 | 中国咸豊六年 | 日本安政三年 |
| 2月 | 『栄力丸漂流記談』*が刊行された。 | |
| 10月 | イギリス軍が広州に攻め込み、第二次アヘン戦争が勃発した。 | |
| この年 | 1854年から1856年にかけて日本で出版された『海国図志』のさまざまな選集〔翻刻本、訓点本、翻訳本を含む〕は二十種類以上にも上った。 | |
| 1858年 | 中国咸豊八年 | 日本安政五年 |
| 6月 | 中国（清）がロシア、アメリカ、イギリス、フランス各国と「天津条約」を結んだ。 | |
| 7-10月 | 日本がアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランス各国と「修好通商条約」を結んだ。 | |
| 1860年 | 中国咸豊十年 | 日本安政七年、万延元年 |
| 10月 | イギリスとフランスの連合軍が北京に攻め込み、中国はイギリス、フランス、ロシア各国と「北京条約」を結び、ここに第二次アヘン戦争が終結した。 | |
| 1861年 | 中国咸豊十一年 | 日本万延二年、文久元年 |
| 8月 | 井上春洋（いのうえしゅんよう）が『瀛環志略』に訓点を付け出版した。 | |

- 3) 拝上帝会とは、洪秀全がキリスト教の影響を受けて設立した宗教団体である。その発端は、科挙受験生であった洪秀全がプロテスタントの布教書である『勸世良言』（モリソンの翻訳事業を助けた中国人の梁發が作成）に接して、文中の『上帝』（GODの訳語）という単語から、自身の見た夢や儒教的ユートピア論と結び付け、中国的に解釈したことに始まる。

| | | |
|-------|--|-------------|
| 11月 | 慈禧太后（ジキタイコウ）（西太后） ⁴⁾ が北京で辛酉政変を起こし、政権を握った。 | |
| 1862年 | 中国同治元年 | 日本文久二年 |
| 6-8月 | 幕府は貿易のため千歳丸を中国の上海に派遣し、これに高杉晋作（たかすぎしんさく）ら（幕府と対立する外様大名の藩士）も随行した ⁵⁾ 。 | |
| 1863年 | 中国同治二年 | 日本文久三年 |
| 7月 | 高杉晋作（たかすぎしんさく）が、倒幕のため、従来の身分制度にとらわれない武装組織である奇兵隊を結成した。 | |
| 1864年 | 中国同治三年 | 日本文久四年、元治元年 |
| 3月 | 日本船の健順丸は上海に到着し、貿易を行った。 | |
| 7月 | 天京（南京）が清国軍によって陥落し、太平天国の農民蜂起は失敗に終わった。 | |
| 1865年 | 中国同治四年 | 日本元治二年、慶応元年 |
| この年 | 丁韪良（テイイリョウ：William Alexander Parsons Martin）が漢訳した『万国公法』が、幕府の開成所により訓点を付して翻刻された。 | |
| 1868年 | 中国同治七年 | 日本慶応四年、明治元年 |
| 1月 | 日本で明治維新が起き、朝廷は王政復古の大号令を發布した。 | |
| 4月 | 明治天皇が「五箇条の御誓文」を宣布した〔旧暦では3月14日宣布〕。 | |
| 1870年 | 中国同治九年 | 日本明治三年 |
| 9月 | 日本の外務権大丞柳原前光（やなぎはらさきみつ）が清国との通商条約の協議を行うため天津に到着した。 | |
| 1871年 | 中国同治十年 | 日本明治四年 |
| 8月 | 清王朝の直隸総督兼北洋通商大臣李鴻章（リコウショウ）と日本の特使大蔵卿伊達宗城（だてむねなり）が「中日修好条約」を結び、中日両国は正式な外交関係を結んだ。 | |
| 11月 | 明治政府が岩倉具視（いわくらともみ）を長とする使節団を欧米の視察に派遣した。 | |
| 1872年 | 中国同治十一年 | 日本明治五年 |
| 5月 | 日本の外務大丞柳原前光（やなぎはらさきみつ）が、李鴻章（リコウショウ）と会見し、条約の改定を求めたが拒絶された。 | |
| 8月 | 清国政府は初めて留学生を西洋へ派遣し、容闳（ヨウコウ） ⁶⁾ を留学生監督として、詹天佑（センテンユウ）ら30人がアメリカ留学に出発した。 | |
| 1873年 | 中国同治十二年 | 日本明治六年 |
| 5月 | 日本の特使副島種臣（そえじまたねおみ）が同治帝（どうちてい）に謁見し、国書を渡した。 | |
| 1874年 | 中国同治十三年 | 日本明治七年 |
| 5月 | 日本が台湾に出兵し、高山族〔現代台湾では原住民〕 ⁷⁾ の生活する地区を侵略した。 | |

- 4) 慈禧太后と呼ぶのが正式だが、日本の歴史書では通称である西太后と表記するのが一般的である。
- 5) これに参加した諸藩の、特に尊皇攘夷を掲げて幕府と対立していた薩摩と長州の藩士達に、尊皇開国と倒幕へと戦略を転換させるきっかけとなった点が、日本史的には重要である。
- 6) アメリカの大学で学んだ最初の中国人で、この当時は実業家であった。
- 7) 日本統治時代は当初「生蕃」と呼ばれ、1930年代後半に「高砂族」と改称された。「高山族」は国民党統治時代の呼称で大陸中国の出版物でも用いられるが、最近の台湾・日本の論文では、彼らが自称する「原住民」を使用することが多い。

| | | |
|-------|--|---------|
| 10月 | 中国と日本が「台湾事件専約」を結び、日本軍は台湾から撤退し、清国政府は日本に銀五十万両を賠償することを決めた ⁸⁾ 。 | |
| この年 | 陳其元（チンキゲン）が『日本近事記』を出版し、“征日論”を鼓吹した ⁹⁾ 。 | |
| 1875年 | 中国光緒元年 | 日本明治八年 |
| 1月 | 光緒帝（コウチョテイ）が帝位を継ぎ、再び慈禧太后（ジキタイコウ）〔西太后〕が執政〔垂簾の政〕を行った。 | |
| 9月 | 日本が朝鮮を侵略し、“江華島事件”を起こした。 | |
| 1876年 | 中国光緒二年 | 日本明治九年 |
| 1月 | 李鴻章（リコウショウ）が中国に駐在する日本の森有礼（もりありのり）公使と会談を行った。 | |
| 2月 | 日本は朝鮮に対して、「日朝修好条約」の締結を強要した。 | |
| 5月 | 浙海関委員〔浙江省税関役員〕の李圭（リケイ）が、博覧会に参加するためアメリカへ向かう途中、日本を訪問し、『環遊地球新録』を〔1877年に〕出版した ¹⁰⁾ 。 | |
| 5月 | 竹添進一郎（たけぞえしんいちろう）が北京から四川省などへ旅行し、帰国後に『棧雲峽雨日記並詩草』を出版した ¹¹⁾ 。 | |
| 1877年 | 中国光緒三年 | 日本明治十年 |
| 2-9月 | 日本では西郷隆盛（さいごうたかもり）を中心に、西南戦争が勃発した。 | |
| 11月 | 初代の駐日公使である何如璋（カジョショウ）が公使館員を率いて日本に着任し、『使東述略』を執筆、〔1879年1月に中国の〕『万国公報』に掲載した。 | |
| 1878年 | 中国光緒四年 | 日本明治十一年 |
| この年 | 東京の文昇堂が石川鴻齋（いしかわこうさい）の編集による『芝山一笑』を出版した。 中国と日本の詩人が向島〔東京都墨田区〕で花見の詩会を開催した ¹²⁾ 。 | |
| 1879年 | 中国光緒五年 | 日本明治十二年 |
| 4-8月 | 王韜（オウトウ）*が訪日して『扶桑遊記』を執筆し、〔栗本鋤雲が訓点を付けて、明治十二年から十三年にかけて、上・中・下三冊を東京の報知社から〕出版した。 | |
| 5月 | 駐日公使何如璋（カジョショウ）が、日本の琉球併呑 ¹³⁾ に抗議した。 | |
| 12月 | 王之春（オウシシュン）が訪日して『談瀛録』を執筆し、〔1880年に中国の文芸斎から〕出版した。 | |
| この年 | 同文館から黄遵憲（コウジュンケン）*の『日本雜事詩』が聚珍版〔活字版〕で刊行された。黄遵憲（コウジュンケン）は『日本国志』の編纂を始めた。 | |
| 1880年 | 中国光緒六年 | 日本明治十三年 |

8) 賠償金支払いよりも、清国が日本側に琉球島民への保護権を事実上認めたことの方が、はるかに重要である。後の琉球処分と冊封体制の崩壊により、東アジア世界に西洋的な秩序概念が適用される直接の端緒となった。

9) 王曉秋『近代中日啓示録』北京出版社、1987年。

10) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本 東遊日記の研究』東方書店、2003年。

11) 新聞集成明治編年史編纂会編『新聞集成明治編年史』林泉社、1936年。

12) この花見は、駐日公使館員の黄遵憲とその友人である日本の漢学者達を中心としたものである。

13) この年の3月、明治政府はいわゆる琉球処分・廃藩置県の最終段階として、琉球藩を廃止して沖縄県を設置した。

| | | |
|-------|---|---------|
| 2月 | 日本で最初の中国問題の研究団体である「興亜会」 ¹⁴⁾ が設立され、同時に中国語学校を付設した。 | |
| 5-6月 | 李筱圃（リショウホ）が訪日し、『日本紀遊』 ¹⁵⁾ を執筆した。 | |
| この年 | 大河内輝声（おおこうちてるな）*が自宅の庭に「日本雑事詩最初稿塚」を立てた。 | |
| 1881年 | 中国光緒七年 | 日本明治十四年 |
| 4月 | 清国政府が黎庶昌（レイショシヨウ）*を駐日公使に任命した。 | |
| 1882年 | 中国光緒八年 | 日本明治十五年 |
| 10月 | 黎庶昌（レイショシヨウ）が東京上野公園にある静養軒で重陽の詩会を催し、詩集『重陽登高集』を編んだ。 | |
| この年 | 黄遵憲（コウジュンケン）がアメリカのサンフランシスコ総領事に赴任するため日本を去った。 | |
| | 俞樾（ユエツ）が『東瀛詩選』四十巻を編集し、[1883年に]出版した ¹⁶⁾ 。 | |
| 1883年 | 中国光緒九年 | 日本明治十六年 |
| 10月 | 黎庶昌（レイショシヨウ）が公使館で重陽の宴を催し、詩集『癸未重九讌集編』を編んだ。 | |
| この年 | 姚文棟（ヨウブントウ）は『琉球地理志』を編訳した ¹⁷⁾ 。 | |
| 1884年 | 中国光緒十年 | 日本明治十七年 |
| 6月 | 岡千仞（おかせんじん）が訪中し、翌年4月に帰国して『観光紀遊』を出版した。 | |
| この年 | 姚文棟（ヨウブントウ）が『日本地理兵要』を編集し、総理衙門から出版された ¹⁸⁾ 。 | |
| | 黎庶昌（レイショシヨウ）主編、楊守敬（ヨウシュケイ）*責任編集の『古逸叢書』が日本で翻刻された。 | |
| 1887年 | 中国光緒十三年 | 日本明治二十年 |
| 9月 | 清朝政府は黎庶昌（レイショシヨウ）を駐日公使に再任した。 | |
| 11月 | 光緒帝は傅雲竜（フウンリュウ）、顧厚焜（ココウコン）らを日本とアメリカ大陸諸国視察のため派遣した。 | |

14) 中国での「志士」活動（いわゆる大陸浪人である）経験者、柳原前光などの外務官僚、ジャーナリストなどで構成された団体で、アジア各国から広く知識人を会員に集めようとした点が際だった特徴である。3月に開校した中国語学校の経営、会報『興亜公報』の発行（後にはほぼ漢文のみで出版）とサロン活動が事業の柱である。1883年には亜細亜協会と名を改め、1899年に東亜同文会に合流した（酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会、1978年、61-5頁）。

15) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本 東遊日記の研究』東方書店、2003年、62頁によると、『小方壺斎輿地叢鈔』に収められている。

16) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本 東遊日記の研究』東方書店、2003年。

17) 実藤恵秀「姚文棟ものがたり」『明治日支文化交渉』（光風館、1943年）、135-7頁によると、『琉球地理志』は修史館（東京大学史料編纂所の前身）編纂の地理書と文部省刊行の小学教科書から琉球の部分を抄訳し、海軍省測量の地図を加えたものであり、日本の琉球併合に対抗する目的で出版された。また、実藤は、この『琉球地理志』が「近代中国人最初の日本語の漢訳」（同書、134頁）であったことが示唆するものは大きいと考えている。

18) 総理衙門とは、アロー戦争後設立された、清朝で初めて一元的に外交を行う機関の名称である。『日本地理兵要』とは、実藤の前掲書によると、日本の陸軍省が作成した『兵要地理小志』をもとに、最近の人物による航海記を加え、主要な港湾・島嶼などについて解説したもの（前掲書136-7頁）である。やはり琉球奪回のために日本と戦争を行う際、戦略の参考とするために出版されたものである。

| | | |
|--------|---|----------|
| この年 | 黄遵憲（コウジュンケン）が『日本国志』四十巻の定稿を完成した。 陳家麟（チンカリン）が『東槎聞見録』を出版した。 宮島詠士（みやじまえいし）は中国河北省保定の蓮池書院 ¹⁹⁾ で張裕釗（チョウユウショウ）に師事し、1894年に帰国した。 | |
| 1888年 | 中国光緒十四年 | 日本明治二十一年 |
| 4月 | 日本の詩人と姚文棟（ヨウブントウ）が修禊詩会を催し、詩集『墨江修禊詩』を編んだ。 | |
| 10月 | 黎庶昌（レイショショウ）が公使館で重陽の宴を催し、詩集『戊子重九讌集編』を編んだ。 | |
| 1889年 | 中国光緒十五年 | 日本明治二十二年 |
| 2月 | 日本の人士が枕流館で宴席を設けて中国使節団を招待し、詩集『己丑讌集続編一枕流館集』を編んだ。 | |
| 3月 | 黎庶昌（レイショショウ）が紅葉館で盛大な曲水修禊の宴を催し、詩集『己丑讌集続編一修禊編』を編んだ。 | |
| 10月 | 黎庶昌（レイショショウ）が紅葉館で重陽節の登高の宴を催し、詩集『己丑讌集続編一登高集』を編んだ。 | |
| この年 | 傅雲龍（フウンリユウ）が『遊歴日本図経』三十巻を出版した。 | |
| 1890年 | 中国光緒十六年 | 日本明治二十三年 |
| 3月 | 黎庶昌（レイショショウ）が紅葉館で曲水の宴を催し、詩集『庚寅讌集三編一修禊編』を編んだ。 | |
| 4月 | 日本の人士が桜雲台で中国公使館の館員をもてなすための宴席を設け、詩集『桜雲台讌集編』を編んだ。 | |
| 10月 | 黎庶昌（レイショショウ）が紅葉館で登高の詩会を催し、詩集『庚寅讌集三編一登高集』を編んだ。 | |
| 10-11月 | 日本の人士が相次いで養浩堂や紅葉館などで黎庶昌（レイショショウ）送別の宴席を設け、詩集『庚寅讌集三編一題禊集』を編んだ。 | |
| 11月 | 日本で第一回帝国議会在開かれた。 | |
| 1893年 | 中国光緒十九年 | 日本明治二十六年 |
| 5-7月 | 黄慶澄（コウケイチョウ）が訪日し、『東遊日記』を著した。 | |
| 1894年 | 中国光緒二十年 | 日本明治二十七年 |
| 7月 | 日本の連合艦隊が豊島沖で中国海軍を襲撃し、中日甲午戦争〔日清戦争〕が勃発した。 | |
| 11月 | 孫文（ソンブン） ²⁰⁾ 、字は中山（チュウザン）がハワイで興中会 ²¹⁾ を組織した。 | |
| 1895年 | 中国光緒二十一年 | 日本明治二十八年 |
| 4月 | 中国と日本は『馬関条約』〔下関条約〕を結び、甲午戦争〔日清戦争〕が終結した。 | |

19) 書院とは民間で設立する学校のこと。明清期のそれは、大部分が科挙受験の準備教育を目的としていたが、政治運動や学問研究の拠点、あるいは地方文化人のサロンとして設立・運営されるものもあった。蓮池書院は後者である。

20) 中国で孫中山が一般的であるが、日本では孫文で一般化しているので、注記として、原文を残した。

21) 清王朝打倒を目指して設立された、広東人による政治結社の一つ。複数回の武装蜂起を行っていずれも失敗した後、1905年、東京でやはり革命運動を行う華興会、光復会と合同し、中国革命同盟会となった。

| | | |
|-------|--|----------|
| 5月 | 康有為（コウユウイ）が各省の挙人〔科学試験の郷試合格者〕 ²²⁾ とともに、万言の書を皇帝に上書した。即ち公車上書である。 | |
| 10月 | 興中会が計画した広州蜂起が失敗し、孫文〔字は中山〕は日本に一度目の亡命を行った。 | |
| この年 | 黄遵憲（コウジュンケン）の『日本国志』が中国で正式に刊行された。 | |
| 1896年 | 中国光緒二十二年 | 日本明治二十九年 |
| 3月 | 清国政府は唐宝鏐（トウホウガク）ら13名を選び、第一回目の公費留学生として日本に留学させた。 | |
| 10月 | 孫文がロンドンで清国政府の駐英公使館に幽閉され、『倫敦蒙難記』 ²³⁾ を執筆した。 | |
| この年 | 中国の京師同文館 ²⁴⁾ は東文館を増設し、日本語に堪能な人材を養成した。 | |
| 1897年 | 中国光緒二十三年 | 日本明治三十年 |
| 3月 | 孫文はロンドン大英博物館で南方熊楠（みなかたくまぐす）と知り合った。 | |
| 9月 | 孫文（字は中山）は横浜で宮崎滔天（みやざきとうてん）と初めて面識を得た。 | |
| この年 | 康有為（コウユウイ）が『日本書目誌』を編纂し〔1898年春に上海大同訳書局から出版され〕た ²⁵⁾ 。 楊守敬（ヨウシュケイ）が『日本訪書志』十七巻を出版した*。 | |
| 1898年 | 中国光緒二十四年 | 日本明治三十一年 |
| 6月 | 光緒帝が〔日本の明治維新をモデルに〕“百日維新”〔戊戌の変法〕を開始し、康有為が『日本変政考』十三巻を献上した。 | |
| 9月 | 伊藤博文（いとうひろぶみ）が訪中し〔変法派は改革について助言を求め〕た。 | |
| 9月 | 慈禧太后（ジキタイコウ）〔西太后〕がクーデターを起こし、光緒帝を幽閉して変法派の知識人を逮捕した。 | |
| 10月 | 康有為と梁啓超（リョウケイチョウ）*が日本に亡命した。 | |
| 11月 | 日本の貴族院議長近衛篤磨（このえあつまる）らが東亜同文会*を創立した。 | |
| この年 | 宮崎滔天は孫文の『倫敦蒙難記』を日本語訳し、〔5月から7月にかけて〕『九州日報』に連載した ²⁶⁾ 。 張之洞（チョウシドウ）が20人以上の留学生を日本に派遣し、陸軍について学ばせた。 | |

22) 郷試は科挙の段階の一つで、省レベルの試験にあたる。挙人とはこの郷試の合格者を指すタイトルで、上京して全国レベルの最終試験である会試（合格すると進士となり、中央の高級官僚となる）の受験資格を得るほか、その地方の名士として待遇される事が多い。

23) 伊地知善継・山口一郎監修『孫文選集 第3巻』（社会思想社、1989年）464頁によると、出版社のもとで誘拐幽閉の記録 *Kidnapped in London* を英語で執筆。この書は翌1897年春にイギリスで出版され、これによって革命家・孫文の名前は欧米で広く知られるようになる。

24) 京師同文館は、洋務運動の時期に北京で設立された学校で、語学教育を重視した。北京大学の前身の一つである。

25) 康有為撰、姜義華・張栄華編校『康有為全集』第3巻の解説（262頁）によると、1898年春に、上海大同訳書局から出版された。古漢籍を集めた『古逸叢書』や『日本訪書志』と異なり、収録されているのは、中国を近代化し、列強の植民地化から救うための新知識を学ぶために有用な書籍のリスト（日本の小中学校教科書を含む）である。

26) 日本語の題名は「幽囚録」。連載期間は1898年5月10日号-7月16日号。連載にあたっては滔天坊の筆名を用いた（宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第一巻、平凡社、1971年）。

| | | |
|-------|--|----------|
| | 日本において中国人留学生を受け入れる日華学堂や成城学校清国留学生部が開設された ²⁷⁾ 。中国福州では東文学社が創立された。 姚錫光(ヨウセキコウ)が日本に赴いて教育を視察し、『東瀛学校挙概』を〔1900年に〕出版した。 | |
| 1899年 | 中国光緒二十五年 | 日本明治三十二年 |
| 1月 | 羅朝斌(ラチョウヒン)〔蘇山人〕の小説『破障子』が『万朝報』 ²⁸⁾ の第101回懸賞短編小説部門で一等賞を取った。 | |
| 6-8月 | 章炳麟(ショウヘイリン)が日本に一度目の亡命をした。 | |
| 7-9月 | 劉学詢(リュウガクジュン)が商業の調査のために訪日し、『遊歴日本考查商務日記』を出版した。 | |
| 9-11月 | 内藤湖南が一度目の訪中をし、『支那漫遊燕山楚水』を著した〔博文館より1900年に発行〕。 | |
| この年 | 日本で学ぶ中国人留学生の数が200名に達した。 | |
| 1900年 | 中国光緒二十六年 | 日本明治三十三年 |
| 1-3月 | 文廷式(ブンテイシキ)が訪日し『東遊日記』 ²⁹⁾ を執筆した。 | |
| 6月 | 〔義和団事件への対応策として〕、日本の内閣は中国への派兵を決め、八か国連合軍に加わって中国に侵入した。 | |
| 8月 | 帝国主義八か国連合軍が北京を攻撃し占領した。 | |
| 8月 | 第一期日本留学生の唐宝鏐(トウホウガク)と戡翼翬(シュウヨクキ)編の日本語教科書『東語正規』が〔東京で戡翼翬らが設立した訳書彙編社から〕出版された。 | |
| 10月 | 興中会が惠州〔中国広東省〕で蜂起し、これに参加した日本人山田良政が犠牲となった ³⁰⁾ 。 | |
| 12月 | 留日学生によるものとしては最初の刊行物である〔雑誌〕『開智録』 ³¹⁾ が創刊された。 | |
| 12月 | 留日学生戡翼翬(シュウヨクキ)らが日本の東京で雑誌『訳書彙編』を創刊した。『清議報』〔横浜〕に、柴四郎〔東海散士〕の政治小説『佳人之奇遇』が梁啓超による翻訳で連載された。 | |

27) 日華学堂は、インド学者の高楠順次郎によって東京本郷に設立された、日本語と普通教育を目的とする学校である(関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、1997年、85頁)。成城学校は、陸軍幼年学校および陸軍士官学校受験の予備校として、戦前期を通して著名であった。蒋介石も学んだ振武学校は、成城学校から清国留学生を分離するために陸軍参謀本部が設立した学校である。

28) 翻訳家・作家・記者として知られる黒岩涙香が設立し、幸徳秋水や内村鑑三も関わったタブロイド判の日刊紙。当時最も大きな新聞の一つであり、『二六新報』とはライバル関係にあった。黒岩涙香自身が執筆した連載小説に加え、権力者のゴシップ報道や社会主義思想の宣伝によって、労働者階級に大きな影響力を持っていた。

29) 文廷式『東遊日記』は、『文廷式全集』に収められているが、刊年不明。

30) このいきさつは、宮崎滔天の『三十三年の夢』に詳しい。南京の中山陵(孫文の墓)には、山田良政を記念した碑が国民党によって建立されている。

31) 『近代中日文化交流史』では「刊物」。原著本文の一覧表(369頁)に刊行時期が(1900.12-1901)と明記してあることと、孔健『中国新聞史の源流——孫文と辛亥革命を読む』(批評社、1994年)56頁に簡単な紹介とともに雑誌と明記してあることから「雑誌」と意識した。以下、留日中国人による刊行物の種別は、同じ方式で訳語を決定した。

| | | |
|--------|---|----------|
| | 東亜同文会が南京に同文書院を創立した。翌年上海に移転して東亜同文書院*と名を改めた。 | |
| 1901 年 | 中国光緒二十七年 | 日本明治三十四年 |
| 2 月 | 青柳猛（あおやぎたけし）が『女学雑誌』513 号に『義和団賛論』の一文を発表した。 | |
| 4 月 | 幸徳秋水（こうとくしゅうすい）述『廿世紀之怪物帝国主義』が〔警醒社書店から〕出版された ³²⁾ 。 | |
| 5 月 | 秦力山（シンリキザン）などが日本の東京で〔雑誌〕『国民報』を創刊した。 | |
| 9 月 | 清国政府とイギリス、アメリカ、ロシア、ドイツ、日本、イタリア、オーストリア、スペイン、ベルギー、オランダの 11 か国が、義和団事件の戦後処理に関して「辛丑条約」〔北京議定書〕を結んだ。 | |
| この年 | 羅振玉（ラシンギョク）が訪日し、『扶桑両月記』を〔1902 年 3 月に、清の教育世界社から〕出版した。 中島裁之（なかじまたつゆき）が北京で東文学社を創設した*。 | |
| 1902 年 | 中国光緒二十八年 | 日本明治三十五年 |
| 1 月 | 嘉納治五郎（かのうじごろう）が東京で弘文学院を創立し、中国留学生の募集を開始した*。 | |
| 2 月 | 梁啓超が日本の横浜で、雑誌『新民叢報』を創刊した。 | |
| 2-7 月 | 章炳麟（ショウヘイリン）が日本に二度目の亡命をした。 | |
| 4 月 | 章炳麟が東京で“支那亡国二百四十二年紀念会”を発起した ³³⁾ 。 | |
| 4 月 | 魯迅（ロジン）が留学のため来日し、弘文学院に入学した。 | |
| 春 | 鄒容（スウヨウ）が留学のため来日し、同文書院に入学した。 | |
| 5-9 月 | 京師大学堂 ³⁴⁾ の教頭呉汝綸（ゴジョリン）が教育の視察のため訪日し、『東遊叢録』を著した〔日本では三省堂書店によってその年の 10 月に中文で出版された〕。 | |
| 6 月 | 黄興（コウコウ）が留学のため来日し、弘文学院に入学した。 | |
| 7 月 | 黄璟（コウケイ）が農業の調査のため来日し、『遊歴日本考查農務日記』を出版した。 | |
| 8 月 | 宮崎滔天が『三十三年之夢』〔国光書房〕を著した ³⁵⁾ 。 | |
| 11 月 | 黄興らが東京で〔雑誌〕『游学訳編』を創刊した。 | |
| この年 | 幸徳秋水の『廿世紀之怪物帝国主義』が中国語に翻訳され、上海の広智書局から出版された。 | |
| 1903 年 | 中国光緒二十九年 | 日本明治三十六年 |
| 4 月 | 留日愛国学生が反ロシア運動を起こし、反ロシア義勇軍を組織した。 | |
| 6 月 | “〔蘇報〕事件”が発生し、章炳麟（ショウヘイリン）と鄒容（スウヨウ）が清国政府に逮捕され、鄒容は獄中で死亡した。 | |

32) 原年表には「5 月」とあるが、原本には、「明治 34 年 4 月 20 日初版刊行 警醒社書店」とあり、修正した。

33) この催しは、最後の漢人王朝である明王朝の滅亡を記念することで、異民族王朝である清王朝への反発と中華ナショナリズムの昂揚を狙ったものである。催し自体は清国側の要請を受けた日本政府によって、当日に開催禁止となったが、留学生による組織的な革命運動の先駆けとなった（島田虎次「章炳麟について」『中国革命の先駆者たち』筑摩書房、1965 年、184 頁）。

34) 光緒帝の詔勅によって設立された中国最初の大学で、20 世紀初頭に京師同文館を統合し、辛亥革命後に北京大学となった。

35) 1902 年 1 月 30 日から 6 月 14 日まで『二六新報』に連載され、翌年中国で訳書が二種刊行された。

| | | |
|------------------------------|--|----------|
| 7月 この年 | 幸徳秋水が〔朝報社から〕『社会主義神髓』を出版した ³⁶⁾ 。 張謇（チョウケン）が大阪博覧会に招待されて訪日し、『東遊日記』 ³⁷⁾ を〔中国の翰墨林書局から〕出版した。 留日中国人学生らは、『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』など〔の雑誌〕を続々と創刊した。 留日中国人留学生の数が1,000名に達した。 | |
| 1904年 | 中国光緒三十年 | 日本明治三十七年 |
| 2月 5月 7月 この年 | 日本軍が旅順口〔遼寧省〕のロシア艦隊を襲撃し、日露戦争が勃発した。 東京の法政大学が、清国人留学生のために法政速成科 ³⁸⁾ を開設した。 秋瑾（シュウキン） ³⁹⁾ が日本に留学し、下田歌子（しもだうたこ）が創立した東京の実践女学校清国留学生部 ⁴⁰⁾ に入学した。 魯迅（ロジン）が仙台医学専門学校に入学し、1906年春に退学した。 宋教仁（ソウキョウジン） ⁴¹⁾ が日本に留学し、前後して法政大学と早稲田大学で学んだ。 | |
| 1905年 | 中国光緒三十一年 | 日本明治三十八年 |
| 7月 8月 9月 11月 12月 | 宮崎滔天（みやざきとうてん）が孫文（ソンブン）、黄興（コウコウ）と東京の鳳楽園〔レストラン〕で会食した。 中国同盟会 ⁴²⁾ が東京で正式に創立され、孫文が総理に選出された。 早稲田大学が清国留学生部を設立した〔1910（明治43）年7月閉鎖〕。 中国同盟会の機関誌『民報』が東京で創刊された。 日本の文部省が発布したいわゆる「清国留学生取締規則」〔正式名「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」（11月26日公布）〕が原因で、中国人留学生が全面ストライキを起こした。陳天華（チンテンカ）は日本が中国人留学生を蔑視することに抗議し、12月8日に憤激して入水自殺した。秋瑾（シュウキン）も日本を去り帰国した。 実践女学校は清国女子留学生のために清国女子速成科を設けた。 留日中国人留学生の数が8,000名に達しピークとなった。 中国に赴任した日本人教師は、最盛期となり、500人以上となった ⁴³⁾ 。 | |
| 1906年 | 中国光緒三十二年 | 日本明治三十九年 |
| 4月 | 雲南省出身の中国人留学生が〔雑誌〕『雲南』を創刊し、1910年6月に停刊した。 | |

36) 前掲『幸徳秋水全集3』。

37) 佐藤三郎著『中国人の見た明治日本 東遊日記の研究』253頁によると、書名は『癸卯東遊日記』となっている。

38) 明治37年4月30日認可、明治41年4月26日の第5班卒業生385名を出し廃止（『法政大学百年史』、166-180頁）。

39) 7月末に来日、8月5日に入校（分教場日誌）。

40) 現在の実践女子大学。

41) この年、宋教仁は西太后派に追われて日本に亡命し、翌年法政大学に入学（1905年6月）、更にその翌年に早稲田大学留学生予科に入学（1906年1月）して、学生運動を行う。

42) 宮崎滔天らの幹旋によって孫文ら広東系の興中会、章炳麟・蔡元培・秋瑾ら浙江系の光復会、黄興・鄒容・陳天華ら湖南系の華興会が合同した革命派の団体。東京で機関誌『民報』を発行し、康有為・梁啓超ら立憲派の機関誌『新民叢報』と、中国の将来像について激しい論戦を繰り広げた。同時に武装蜂起も継続したがすべて失敗し、1911年の武昌蜂起（メンバーが多数参加しているが孫文や同盟会は主導していない）が成功した後、中国国民党の母体となった。

43) 著名人には五四運動に際して中国人留学生のために奔走した吉野作造がいる。

| | | |
|--------|---|---------------|
| 7月 | 章炳麟（ショウヘイリン）が出獄後日本へ三度目の亡命を行い、留日学生は東京の錦輝館で歓迎大会を開催した。 | |
| 8月 | 蔡元培（サイゲンバイ）が井上圓了（いのうええんりょう）の著作『妖怪学講義録』巻之一～八のうち、巻之一上「総論」を翻訳し、『妖怪学講義録総論』として上海商務印書館から出版した ⁴⁴⁾ 。 | |
| 9月 | 宮崎滔天（みやざきとうてん）らが雑誌『革命評論』を創刊した。 | |
| 11月 | 東京で『民報』の創刊1周年記念会が開催され、孫文（ソンブン）、章炳麟（ショウヘイリン）、宮崎滔天（みやざきとうてん）らが講演した。 | |
| 1907年 | 中国光緒三十三年 | 日本明治四十年 |
| 4月 | 章炳麟（ショウヘイリン）らが東京で亜州和親会 ⁴⁵⁾ の設立を発起した。 | |
| 4月 | 日本政府が満鉄調査部を設立した。 | |
| 8月 | 劉師培（リュウシバイ）らが日本で社会主義講習会を開き、『天義』を創刊し、無政府主義「アナーキズム」を宣伝した。 | |
| この年 | 留日学生による「雑誌」『河南』、『四川』、『秦隴報』などが創刊された。 | |
| 1908年 | 中国光緒三十四年 | 日本明治四十一年 |
| 8月 | 清国政府が立憲君主制への移行の開始を宣言し、その準備期間を9年とした。 | |
| 10月 | 日本政府は『民報』24号の発行を禁止し、章炳麟（ショウヘイリン）は法廷で是非を争った。 | |
| 11月 | 光緒帝と慈禧太后「西太后」が相次いで世を去り、溥儀（フギ）が即位して宣統帝（セントウテイ）と称した。 | |
| 1909年 | 中国光緒三十五年 | 日本明治四十二年 |
| 7月 | 魯迅（ロジン）が七年間の日本留学に終止符を打ち、帰国した。 | |
| この年 | 中国人留学生の人数は5,000人余りであった ⁴⁶⁾ 。 中国に赴任していた日本人教師は、400人以上であった。 | |
| 1910年 | 中国光緒三十六年 | 日本明治四十三年 |
| 5月 | 日本政府は、大逆罪の容疑で幸徳秋水などの社会主義者を逮捕して翌年1月に処刑した。 | |
| 8月 | 日本は朝鮮を併合し、いわゆる「日韓併合条約」[正式名称は「韓国併合ニ関スル条約」]を結んだ。 | |
| 1911年 | 中国光緒三十七年 | 日本明治四十四年 |
| 10月10日 | 武昌「中国湖北省」で新軍が蜂起し、辛亥革命の発端となった。 | |
| 10月13日 | 『朝日新聞』、『時事新報』、『大阪毎日新聞』などの日本の新聞が武昌蜂起のニュースを報道し始めた。 | |
| 11月 | 『中央公論』、『日本及日本人』など日本の雑誌が中国の辛亥革命に関するニュースと評論とを大きく報道した。 | |
| 11月2日 | 早稲田大学が中国事変演説会を開催し、同時に『早稲田講演臨時増刊——中国革命号』を出版した。 | |
| この年 | 楊守敬（ヨウシュケイ）は水野元直（みずのもとなお）の要望に応じて「書道の入門書である」『学書述言』を著した。 | |
| 1912年 | 中国民国元年 | 日本明治四十五年、大正元年 |

44) 井上圓了講述『妖怪学講義』は、明治26年8月24日刊「緒言」にはじまり、明治27年10月20日に全25冊で完結した。再版は明治29年6月14日、合本6冊で刊行、第3版は、明治30年8月5日刊。哲学館発行。これは巻之一上「総論」を忠実に全訳したものである。

45) 堺利彦や幸徳秋水などの日本の社会主義者と劉師培ら中国革命同盟会左派に加え、ベトナムのファン・ボイチャウやインド人革命家らの民族主義者とが反帝国主義によって結びついた団体。

46) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）巻末の表では4,000人程度。

| | | |
|--------|--|--------|
| 1 月 | 孫文（ソンブン）が南京〔江蘇省〕で臨時大總統に就任し、中華民国の成立を宣言した。 | |
| 2 月 | 宣統帝溥儀（セントウテイフギ）が退位し、孫文も〔臨時大總統を〕辞職した。臨時参議院は袁世凱（エンセイガイ）を選出して臨時大總統とした ⁴⁷⁾ 。 | |
| 7 月 | 日本の明治天皇睦仁が世を去り、皇太子嘉仁（よしひと）が即位して、大正と改元した。 | |
| 8 月 | 孫文、宋教仁（ソウキョウジン）らが同盟会を改組して国民党を結成した。 | |
| 12 月 | 東京では憲政擁護連合大会が開催され、日本各地で護憲の気運が高まった〔第一次護憲運動のはじまり〕。 | |
| この年 | この年の中国人留学生の人数は 1,400 人余りであった。 | |
| 1913 年 | 中国民国二年 | 日本大正二年 |
| 2 月 | 東京市民数万人が議会を取り囲み、桂太郎（かつらたろう）内閣に総辞職を迫った。 | |
| 2 月 | 孫文が日本に視察に赴き、日本の各界著名人から熱烈な歓迎を受けた。3 月 23 日に長崎から帰国した。 | |
| 3 月 | 袁世凱の指示によって、国民党の領袖であった宋教仁（ソウキョウジン）が上海駅で暗殺された。 | |
| 7 月 | 国民党が反袁世凱を標榜して“第二革命”を起こした。 | |
| 9 月 | 第二革命が失敗した。 | |
| 12 月 | 郭沫若（カクマツジャク）が日本に留学し、まず東京で第一高等学校予科に入学、その後岡山第六高等学校を経て九州帝国大学医科に入学し、1923 年 4 月に卒業して帰国した。 | |
| 1914 年 | 中国民国三年 | 日本大正三年 |
| 1 月 | 李大釗（リダイショウ）が日本に留学し、早稲田大学政治経済科に入学して 1916 年に帰国した。 | |
| 3 月 | 日本の護憲運動が再び高揚し、山本権兵衛（やまもとごんべえ）内閣に総辞職を迫った ⁴⁸⁾ 。 | |
| 7 月 | 孫文（ソンブン）が日本で中華革命党を創立した。 | |
| 8 月 | 第一次世界大戦が始まり、日本はドイツに宣戦を布告した。 | |
| 1915 年 | 中国民国四年 | 日本大正四年 |
| 1 月 | 日本の駐華公使日置益（ひおきえき）が袁世凱（エンセイガイ）に二十一条（対華二十一か条要求）を提示した。 | |
| 2 月 | 東京の留日中国人学生が反袁世凱大会を挙行し、同時に日本留学生総会を創立した。 | |
| 5月9日 | 袁世凱（エンセイガイ）が正式に二十一条要求を承認した。 | |
| 9 月 | 陳独秀（チンドクシュウ）主編の『青年雑誌』が上海で創刊され、新文化運動が始まった。 | |
| 10月25日 | 孫文（ソンブン）と宋慶齡（ソウケイレイ）が日本の東京で結婚した。 | |
| 12月12日 | 袁世凱（エンセイガイ）が帝制の復活を宣言し、国号を中華帝国に改め、翌年をもって“洪憲（コウケン）元年”とした。 | |

47) 歴史的には、孫文から袁世凱に臨時大總統の地位を譲り渡す交換条件として、袁世凱に宣統帝を退位させたという経緯がある。

48) 内閣瓦解は 4 月。山本内閣を退陣に追い込んだのは、直接的にはシーメンス事件（憲政上の問題ではなく海軍の汚職疑惑）である。ただ、運動の担い手は都市の新旧中間層および下層民・職人層だったこと、藩閥の打破と政党政治を要求したことで、前年の第一次護憲運動と連続性がある（成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書新赤版 1045、岩波書店、2007 年、21-26 頁）。

| | | |
|----------|--|--------|
| 12月25日 | 蔡鍔（サイガク）が護国軍を組織して袁世凱討伐のために出兵し、護国戦争が勃発した。 | |
| 1916 年 | 中国民国五年 | 日本大正五年 |
| 6 月 | 袁世凱が全国人民の非難の声の中で死に、黎元洪（レイゲンコウ）が代理大統領となった。 | |
| この年 | この年の中国人留学生の人数は 3,000 人余りであった。 | |
| 1917 年 | 中国民国六年 | 日本大正六年 |
| 3 月 | 章炳麟（ショウヘイリン）が上海で亜州古学会を立ち上げた。 | |
| 4 月 | 宮崎滔天（みやざきとうてん）が長沙（湖南省）に行き、黄興（コウコウ）の国葬に参加した。 | |
| 6月(7月) | 吉野作造（よしのさくぞう）が『支那革命小史』を〔日本の万葉書房から〕出版した。 | |
| 7 月 | 張勳（チョウクン）が溥儀（フギ）の帝位への復帰を目論んでクーデターを起こしたが失敗し、段祺瑞（ダンキズイ）に敗れ〔オランダ公使館に亡命し〕た。 | |
| | 孫文（ソンブン）が広州で護法運動を開始した。 | |
| 夏 | 彭湃（ホウハイ）が日本に留学し、翌年早稲田大学政治経済科に入学し、1921 年に卒業して帰国した。 | |
| 9 月 | 周恩来（シュウオンライ）が日本に留学し、東亜高等予備学校に入学〔1917 年 10 月〕し、1919 年に帰国した ⁴⁹⁾ 。 | |
| 11月7日 | ロシアで十月革命が勃発し、そのニュースは即座に中国と日本に伝わった。 | |
| 1918 年 | 中国民国七年 | 日本大正七年 |
| 5 月 | 留日中国人留学生が「中日共同防衛軍事協定」に反対し、次々に学業を放棄して帰国した。 | |
| 6 月 12 日 | 孫文（ソンブン）が日本の門司〔福岡県北九州市〕に到着し、記者に談話を発表して、6 月 23 日に神戸から上海に帰国した。 | |
| 11 月 | 第一次世界大戦が終結した。 | |
| 12 月 | 李大釗（リダイショウ）と陳独秀（チンドクシュウ）が雑誌『每周評論』を創刊した。 | |
| 12 月 | 吉野作造（よしのさくぞう）らが黎明会を結成し、宮崎龍介（みやざきりゅうすけ）らは新人会を結成した*。 | |
| 1919 年 | 中国民国八年 | 日本大正八年 |
| 1 月 | 河上肇（かわかみはじめ）主編の『社会問題研究』が創刊された。 | |
| 1 月 | 『每周評論』が吉野作造（よしのさくぞう）の手紙を掲載した。 | |
| 2 月 | 『每周評論』が李大釗（リダイショウ）の『祝黎明会』などの文章を掲載した。 | |
| 4 月 | 周恩来（シュウオンライ）が帰国の途中で京都に立ち寄り、『雨中嵐山』など四首の漢詩を詠んだ。 | |
| 5月4日 | 北京の学生が愛国デモ行進を行い、五四運動が勃発した ⁵⁰⁾ 。 | |

49) 周恩来著、矢吹晋編、鈴木博訳、『周恩来『十九歳の東京日記』』小学館文庫、小学館、1999 年。
東亜高等予備学校は 1914 年に松本亀次郎が創立した中国人のための予備校。

50) 中国大陸本土での運動も含めて、五四運動を主導したのは、朝鮮の三一独立運動に強い衝撃を受けて 3-4 月に帰国した日本留学生、およびそれ以前に日本留学を経験した人たちであった（さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981 年、286-337 頁）。

| | |
|-----|---|
| 6月 | 吉野作造（よしのさくぞう）が「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」[『中央公論』六月号]、「北京大学学生騒擾事件に就て」[『新人』六月号]などの一連の論説を発表し、中国の五四運動を応援した ⁵¹⁾ 。 |
| 8月 | 吉野作造（よしのさくぞう）が『解放』八月号に「日支国民的親善確立の曙光——両国青年の理解と提携の新運動」を発表し、日中の青年交流に向けた理念と計画とを提唱した。 |
| 秋 | 宮崎龍介（みやざきりゅうすけ）が中国の北京・上海などを訪問し、中国の学生運動を支持した ⁵²⁾ 。 |
| この年 | この年の中国人留学生の人数は3,000人余りであった。 |

- 51) 吉野は同時に、東京でデモ行進を行って逮捕された中国人留学生を早期に釈放させるために奔走している。詳細は吉野作造著、松尾尊兌編『中国・朝鮮論』（東洋文庫 161、平凡社、1970年）の解説および、『吉野作造選集 14』日記2（岩波書店、1996年）を参照。
- 52) 吉野の論説と併せて、翌年の北京大学学生団の訪日に向けた下準備である。

3. 人物と事項についての解説

本年表中、重要な事件や人名のうち、詳細な説明が必要と思われる事項を、登場順に解説する。個々の記述についての典拠は解説中に、全般的な典拠は項目末尾に記す。なお、引用箇所を含む用語は出来る限り当時のものに従い、現状では不適切とされる用語も含めて改変は行っていない。

a) 栄力丸漂流記談

栄力丸の船員の一人である文太の体験談を、鳥取藩の漢学者である堀熙明（ほりひろあき）らがまとめた。新村出監修『海表叢書』三卷（更生閣、1927-8年）の解題によると、安政3（1856）年2月にごく少数が流布したと見られる。

栄力丸は摂津国の廻船で、1850年に江戸から兵庫への帰路、紀州沖で難破し、乗組員は南鳥島付近でアメリカ船に救助されて、サンフランシスコに上陸した。生き残った乗組員は、開国の交渉材料の一つとしてアメリカの軍艦に乘せられて香港に到着し、上海で、今日「につぼん音吉」（モリソン号事件で帰国し損ねた漂流民）として知られる人物に出会う。音吉は、自身の経験からアメリカの外交使節と軍艦で帰国するのは非常に危険であると考え、ペリー艦隊から栄力丸乗員のほとんどを逃亡させ、長崎行の中国船に乗せて1854年に無事帰国させた。栄力丸乗組員には、後にアメリカ大使館員として来日し、有名になるアメリカ彦蔵（ジョセフ・ヒコ）がいるが、彼は文太らの帰国以前に別行動を取ってアメリカへ帰っている。また、このとき逃亡しなかった仙太郎は、ペリー艦隊の水夫 Sam Patch として来日し、1860年に宣教師ゴープル夫妻の召使いとして帰国している。

参考文献

- 新村出監修『海表叢書』三卷、更生閣、1927-28年
 春名徹『につぼん音吉漂流記』晶文社、1979年

b) 羅森【ラ シン】

中国広東出身で号は向喬。1853年にペリーが最初に浦賀に来航した際、主席通訳官を務めた S. W. ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 1813-84) の友人であった縁で、1854年、ペリー艦隊が二度目に来航した際、横浜、下田と箱館で漢文通訳を務めた。日本語の会話は出来なかったようである。そのため、羅森は交渉に当たった堀達之助・平山謙二郎などの日本の役人や知識人らとは筆談で交流し、幕末の日本で非常に有名な人物となった。彼の「日本日記」によると、差し出された扇子に詩を書いて返したものが500本以上にのぼった。このやりとりは日本側の記録にも「清朝人も乗組居り。其内壹人羅森と申すもの、日々上陸いたし小間ものやに出会之節、扇など出し望候得は即吟之詩作等相認候よし。数本見受候所、手跡も立派の事に御座候。(中略) 以前之小間物や怪敷儀は無之かと手真似をもって相尋候処、我知其法と相認め、銀カンサシ二本我買釧二牧広東羅森と相認相渡」(「小田原藩等ヨリ仙台藩大槻磐溪二下田近況報知ノ書翰拔萃」、維新史学会編『幕末維新外交史料集成』第3巻、財政経済学会、1942-4年、99頁。旧字体は常用漢字に改め、句読点と送り仮名を追加している) としてほぼ同じ記述が残っているほか、扇の現物が北海道大学北方資料室に所蔵されている。特に箱館での交渉の際には、幕府側のオランダ通訳の到着が遅れたため、羅森はウィリアムズとともに重要な交渉を任されている。ウィリアムズが妻に宛てて送った書簡には、「これまで私が話したのは、たいていささやかなことであり又重要でない事柄だったので、しくじったところで大して問題にはなりませんでした。ところが、今や事柄は深刻になりましたので、私は羅にかなり手伝わせ、もう一つの言葉(中国語)の助けを借りて、あまり誤りをしでかさないようにしています」(サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ著、洞富雄訳「付録一 日本遠征中のウィリアムズ書翰」『ペリー日本遠征随行記』新異国叢書8、雄松堂書店、1970年、446頁)と記されている。この記述から、ペリー艦隊での通訳の位置づけは、交渉の際の詳細を詰める際はオランダ語が基本であり、日本語・漢文通訳はそれを補完する役割を果たしていたことが端的に読み取れる。

参考文献

羅森著、野原四郎訳「ペリー随伴記」岡田章雄編『外国人の見た日本2——幕末・維新』筑摩書房、1961年(訓点を付けた原文が、羅森「日本日記」、大久保利謙『江戸』第三巻、渉外編、立体社、1981年に収録されている)

羅森筆の扇(北大所蔵の画像データ): <http://ambitious.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/photo/doc/0B036930000000.html>

王曉秋著、木田知生訳『中日文化交流史話』日本エディタースクール出版部、2002年

c) 吉田松陰の密航未遂事件と S. W. ウィリアムズ

旧暦1854年3月27日夜、下田沖に停泊していたペリー艦隊に対し、吉田松陰とその同行者である金子重輔がアメリカへの密航を求めて乗船したが、拒絶された事件。その際、松陰はオランダ語、英語共にほぼ何も知らなかったため、意思の疎通には基本的に漢文を用い

た。まず27日昼に下田に上陸していたアメリカ人のスポルディングに、現在「投夷書」として知られている漢文の手紙を手渡し、密航の目的を述べ、夜海岸に迎えの船を出すよう求めている（W. スポルディング「日本遠征記」149-158頁）。その夜松陰らは自ら船を出してペリー艦隊に接近し、身振り手振りでのやりとりの末に現れたウィリアムズと日本語による会話で交渉しており、その様子が「回顧録」付録の「三月二七夜の記」に詳しく記されている。ペリー来航時、どのような言語で意思疎通を図ったかが具体的であるため、一部抜粋して引用する。

予筆を借せと云ふ手眞似すれども一向通ぜず、頗る困る。其の内日本語をしるものウリヤムス出で来る。因つて筆をかり、米利堅にゆかんと欲するの意を漢語にて認めかく。ウリヤムス云はく、「何国の字ぞ」。予曰く、「日本字なり」。ウリヤムス嗤ひて曰く、「もろこしの字でこそ」。(中略) 予廣東人羅森と書き、「此の人に遇はせよ」と云ふ。ウリヤムス云はく、「遇ひて何の用かある。且つ今臥して牀にあり」。(中略) ウリヤムス日本語を使ふ。誠に早口にて一語も誤らず、而して吾れ等の云ふ所は解せざる如きこと多し。蓋し渠れが狡黠ならん。是を以て云はんと欲すること多く言ひ得ず。(吉田松陰著、山口県教育会編「三月二七夜の記」『吉田松陰全集』第9巻、大和書房、1974年、392-4頁)

松陰と交渉したサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズは1813年にニューヨーク州に生まれ、広東やマカオで、印刷宣教師として月刊誌 *The Chinese Repository* (1832-1851) の発行や『中国総論』(*The Middle Kingdom*, 1848) の執筆を行っていた。日本遠征の主席通訳官となったのはペリーの要請によってである。モリソン号事件の際にも一度来日しており、それ以降の数年間、音吉をはじめとする漂流民を自分の印刷所に雇って日本語を教わっている。彼の日本語能力については、第一回目の最初の会話の際には、日本語での交渉は困難と見た日本側がオランダ語に切り替えた記述が見られる(『ペリリ提督日本遠征記』(二)、189-190頁)。ウィリアムズ自身、自著で以下のように述べている。

栄左衛門〔引用者注：浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門〕は澄んだ声で語り、達之助 Tatsunosuke〔和蘭小通詞堀達之助〕はそれをオランダ語に通訳してポートマン〔引用者注：ペリーが雇い入れたオランダ語通訳〕に伝えた。私は栄左右衛門たちが話すことはほとんど理解できたが、あんなふうにしやべるにはかなりの練習が必要であろう。私が日本語を知っている以上にオランダ語をよく知った者が彼らの中に一人いたと云うことは、意思の疎通が十分に行われるようになると考えるのでありがたかった。(中略) 彼らが乗艦する前で、私が舷門に立っていたときのことだが、一人の日本人が「アメリカ人ですか？」と尋ねたので、この質問に驚いた語調で「そうです、たしかに」と答えた。すると、なぜかみながどっと笑った。(ウィリアムズ『ペリー日本遠征随行記』95頁)

第二回目の交渉の際には、ウィリアムズの日本語能力は、『亜墨理駕船渡来日記』で、「言

語日本人同断」と評価されている（洞富雄「解題」『ペリー日本遠征随行記』530-531頁）ほか、随行記の本文中にも、通詞以外の使節団の武士らとも気軽に会話する場面が頻出する。この『ペリー日本遠征随行記』は、他にも、交渉の過程で、英語の堪能な通訳（和蘭小通詞）が乗船してきたこと（前掲『ペリー日本遠征随行記』173頁）や、条約文起草のプロセスについて、幕府側が持参したオランダ語訳の条文をポートマンがチェックしていたことやウィリアムズと恐らく羅森とで、幕府側の通詞が漢訳した条文を確認・修正していたことなど（同書、252-3頁）、ごく初期の日米外交史におけるコミュニケーションの実情について大変興味深い記述を含んでいる。

S. W. ウィリアムズはその後も中国で研究と伝道を続け、1856年に『英華分韻撮要』(*A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*)を、1884年に『漢英韻府』(*A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*)を編纂した。

参考文献

吉田松陰著、山口県教育会編『吉田松陰全集』第9巻、大和書房、1974年

サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ著、洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』新異国叢書8、雄松堂書店、1970年

J. W. スポルディング著、島田孝右訳『日本遠征記』新異国叢書、第Ⅲ輯4、雄松堂出版、2002年
ペルリ著、土屋喬雄・玉城肇共訳『ペルリ提督日本遠征記(2)』岩波文庫、1948年

d) 王韜【オウ トウ】(1828-97)

中国江蘇省の出身で、年表に登場する『扶桑游記』の著者。香港における初期の中国系諸新聞の発展に尽くした主要人物として知られ、「中国ジャーナリズムの父」とも評される。上海の墨海書院で宣教師メドハーストに雇われて翻訳を行っていた。太平天国の乱の際、清朝から内通の嫌疑をかけられたために香港へ亡命し、洋務・変法論者として注目されるほか、洋務派官僚や外国人とも親交があった。イギリス留学から帰国後、1873年から『循環日報』という華字新聞を発行し、主筆となって変法維新を鼓吹した。この『循環日報』は中国人の資本によって発行され、成功した最初の華字日刊紙であり、それゆえに、中国知識人への影響力は大きかったとされている。

参考文献

卓南正『中国近代新聞成立史——1815～1874——』ペリかん社、1990年、229-260頁

西里喜行『清末中琉日関係史の研究』（京都大学出版会、2005年）、614頁の附章Ⅱ「王韜と『循環日報』について」

他に、彭沢周『中国の近代化と明治維新』（同朋舎出版部、1976年）中の「王韜の日本観」の節

e) 黄遵憲【コウ ジュンケン】(1848-1905)と『日本国志』

中国広東出身の知識人（郷紳）で、光緒2（1876）年、科挙の地方試験に合格して挙人とな

った。1877 年、初代公使となった何如璋の書記官として来日し、日本の知識人と盛んに交流した。その際、大河内輝声や石川鴻齋、岡千仞などの旧派の漢学者のみならず、東京女子師範学校の初代校長を務めた中村正直など、新しい世代の知識人とも積極的に交流し、この間に救国の策として立憲主義に基づく改革が最適であるという思想を固めている。その成果として、在任中に『日本雑事詩』を出版し、日本の外交・兵制から地理・風俗に至る 12 分野を編年体で網羅した『日本国志』の初稿をまとめた。1882 年には日本を離れ、サンフランシスコ総領事を 4 年弱勤めた後、一時官を辞して『日本国志』の定稿を完成させた。『日本国志』の出版年は、本年表によると 1895 年となっているが、彭沢周は『中国の近代化と明治維新』（同朋舎出版部、1976 年）の 151 頁で、孫仲聯撰『黄公度先生年譜』の光緒二十年甲午の條に拠って、1890 年に広東の富文斎で版木に付され、その初版は 1894 年に出されたとしている。同じく『日本国志』が広く読まれるようになったのも、彭沢周は、黄遵憲が梁啓超を上海に呼び、「時務報」の発刊を準備させた際に併せて再刊した 1896 年であるとしている。川副悠史が確認した都立図書館実藤文庫所蔵のマイクロフィルム版にも第一巻に「光緒十六季羊城富文斎刊版」とある。そのほか、刊年や出版元は明記されていないが、後序に、「光緒二十二年十一月朔新会梁啓超叙」とある。実藤恵秀が広く中国語文献を収集したのは昭和四年以降であり、そのとき入手が容易だったのは大量に出版された時期のものである可能性が高いと考えると、この事実は彭沢の説を補強している。その後黄遵憲はロンドン・シンガポールに赴任し、帰国後は、梁啓超とともに上海で雑誌「時務報」を創刊したほか、在地の官僚として「湖南新政」に参加するなど、実際の変法運動にも積極的に関わった。そのため、戊戌の変法が潰えた際に官を辞し、余生は故郷で著述と教育に専念した。

参考文献

黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩』東洋文庫 111、平凡社、1968 年

佐藤保「黄遵憲と日本」伊藤虎丸ほか編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学交流史』汲古書院、1986 年

張偉雄『文人外交官の明治日本—中国初代駐日公使団の異文化体験—』柏書房、1999 年

実藤恵秀「邦書の漢訳」『明治日支文化交渉』光風館、1943 年

f) 大河内輝声【おおこうち てるな】(1848-82)

17 世紀初期に知恵伊豆と呼ばれた松平信綱の子孫で最後の高崎藩主。幕末（1867 年）に陸軍奉行並、維新後は藩知事を務めた。大学南校（幕末の蕃書調所の後身で、後に東京大学の一部となる）で洋学を学ぶ。また、漢詩文をよくし、初代の駐日公使である何如璋の随員と筆談で親交を結び、少なくとも 94 冊にのぼる筆談記録「大河内文書」（現存は 71 冊）を残した。奇矯な人柄でも知られる。

参考文献

さねとうけいしゅう編訳『大河内文書——明治日中文化人の交流』東洋文庫 18、平凡社、1964

g) 黎庶昌【レイ ショショウ】(1837-97) と『古逸叢書』

中国貴州省の出身で、曾國藩の秘書からイギリス、スペインで外交官としてのキャリアを積み、1880 年代に駐日公使を 2 回務める。『重陽登高集』ほか、この年表に登場するいくつかの詩集の編者だが、その出版形態は不明である。

在任中日本国内に存在する漢籍の調査なども行い、日本に存在した中国の古典 26 種 200 巻を復刻した『古逸叢書』（光緒年間の出版）を著した。在任中の案件としては、琉球の帰属問題及び朝鮮政策の衝突が主なものである。

参考文献

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第 5 巻、吉川弘文館、1992 年、265 頁（項目名は【古逸叢書】）

h) 楊守敬【ヨウ シュケイ】(1839-1915) と『日本訪書志』

中国湖北省出身の書誌学者・書家で中国では地理学者として有名である。1880（明治 13）年、何如璋の招きで清国公使館員として来日し、日本にある宋、元、明代の古書および日本で著された漢籍を収集し、あるいは所在を確認して、235 種の解題を執筆した。その成果である『日本訪書志』（清光緒二十三年刊本が東洋文庫に所蔵されている）は、現在、全文の画像データが下記の URL で公開されている。

<http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/siryo/kanseki/KR010013.htm>

i) 梁啓超【リョウ ケイチョウ】(1873-1929) と『新民叢報』

梁啓超は広東省出身の知識人（郷紳）で挙人のタイトルを持つ。ジャーナリスト・学者・政治改革者として活躍し、近代西洋文明の思想と制度とを、平易な漢文に翻訳して紹介した。政治的には、清朝を存続させ、開明専制で中国を近代化するべきだと主張する立憲改革派（保皇派）の立場を取った。啓蒙主義者としての影響力は中国一国にとどまらず、朝鮮・台湾・ベトナムなど漢字文化圏全域に及んだ。郷試合格の直後に康有為と会い、彼の大同思想に強い影響を受けて忠実な弟子となったこと、黄遵憲に招かれて上海で雑誌『時務報』の主筆を務め、湖南新制を主導したこと、戊戌の政変の失敗により、1898 年から 1911 年まで日本に滞在して、その間に日本・台湾・ベトナムなどの知識人とも筆談で交流を持ったことが重要である。例えば、ベトナムの革命家で、出国する前から梁啓超の翻訳書や『新民叢報』の愛読者であったファン・ボイチャウ（潘佩珠：1867-1940）は、1905 年 4 月に横浜で梁啓超と会談した際の様子を、自伝に「心事之談多用筆話。梁公欲悉其辭。約於次日再会。筆談可三四点鐘。」（話の核心的な部分は、主に筆談を用いた。梁公は潘とさらに話をしたいと考え、近日中に再会する約束をした。その日の筆談は 3-4 時間にもなっただろう）と書

き記しているほか、梁が引き合わせた犬養毅ら日本の政治家ともやはり筆談で自在に会談している（「潘佩珠自判」254-6頁）。また日本統治下の台湾で改良主義的な民族主義運動の象徴兼パトロンとなった林献堂（1881-1956）は、1907年に来日した際、奈良の旅館で梁啓超に会って今後の台湾についてアドバイスを求めている。その際広東語が話せない林献堂と、福建及び台湾で話される閩南語が話せない梁啓超とは、お互いに筆談で会話し、林献堂はその際の書き付けを故郷に送って、一族の子弟に読ませている（『梁啓超年譜長編（二）』649-50頁）。これらの事例は、中国人同士であっても出身地が異なれば口頭で会話できないことが珍しくない一方、この時期の東アジアでは、漢文の読み書きが出来れば外国人同士であっても意思の疎通自体に不自由はなく、漢文による筆談が一種の共通語としての役割を担っていた事を示している。ただし、思想や世界観まで共有し得たかはまた別の問題である。

更に注目すべき点は、梁啓超が大量の日本語の書籍（西洋書の日本語訳を含む）を漢訳して出版したことと、横浜で『清議報』、『新民叢報』といった漢文の雑誌を発行したこととがあげられる。特に1902年2月に創刊され、1907年まで発行された『新民叢報』は、梁啓超自身が読破した日本語書籍から得た新知識や思想について大量の記事を執筆したため、「梁啓超体」と呼ばれる新しい文体と併せて東アジア全域に啓蒙思想、特に民族主義と立憲主義、加えて社会進化論を広めた。また『新民叢報』は、1905-6年にかけては、救国と近代化の方策を巡って、孫文ら中国革命同盟会の機関誌である『民報』と激しい論争を行った。この論争の争点は突き詰めると清朝が中国の近代化をなし得る存在か否かに尽きる。陳天華らは腐敗・硬直化し外国勢力の言いなりになった清朝に半植民地的な状況を改善する力はなく、漢族ナショナリズムに基づいて民衆が革命を起こして共和国を樹立するしかないと主張したのに対し、梁はフランス革命の例を引いて、革命はさらなる外国の侵略を招くだけであり、むしろ清朝の保護下で資本家を保護し、国富を増やすべきであると反論した（Levenson, pp. 156-161）。

参考文献

Joseph Richmond Levenson, *Liang Chi-chao and the Mind of Modern China*, Second Edition, Thames and Hudson, 1959.

狭間直樹編『共同研究 梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年

吉澤誠一郎『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国を見る—』岩波書店、2003年

潘佩珠「潘佩珠自判」内海三八郎『潘佩珠伝——日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯——』芙蓉書房出版、1999年、239-317頁

吳天任編『民国梁任公先生啓超年譜』第二冊、台湾商務印書館、1988年

j) 東亜同文会と東亜同文学院

明治後期から昭和前期にかけて、日本の大陸政策と、論壇や学术研究との両面に大きな影響力を持った民間団体。東亜会と同文会という当時の主立った中国研究団体の合同によって成立した。会長となった近衛篤磨は「支那保全論」を唱え、日本は西洋列強による中国分割

に加わるのではなく、東アジア全体で協力して経済・教育・文化の程度向上を図ることで、東アジアの安定と列強への対抗を図ろうという近衛の方針が会全体の基本政策となった。ただ、「支那保全論」自体は、一方では「他力保全」として他国による保全、言い換えれば列強による中国分割を容認・正当化しうる論理でもあり、その内容は論者や状況によって変わる曖昧なものである点には注意すべきである。具体的な活動内容は清朝の改革を援助し、康有為や梁啓超ら立憲派を支援することとなる。会の事業としては、機関誌『東亜時論』（日本国内向け）と『東亜時報』（上海で発行）などや各種の中国研究書の出版と、東京同文書院及び東亜同文書院の運営が主なものである。

その東亜同文書院は、1900年に設立された南京同文書院を母体とし、1901年に上海で設立され、日本政府の資金で運営された。当初は東京同文書院で中国人留学生を、東亜同文書院で日本人留学生を教育していたが、1920年に上海側に一本化されている。中国語と英語、日本語を徹底して教えたこと、5期生以降には卒業論文のための中国調査旅行（「大旅行」と呼ばれた）が義務づけられたことがカリキュラム上の特徴である。1945年、日本の敗戦によって東亜同文書院は自然消滅したが、学生や教員、および文献や『中日大辞典』の編纂事業は愛知大学に引き継がれた。

参考文献

酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会、1978年

藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』大明堂、2000年

相原茂樹「近衛篤磨と支那保全論」岡本幸治編著『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、1998年

k) 中島裁之【なかじま たつゆき】(1869-?)と東文学社

熊本県八代の素封家の家に生まれ、1891年から中国国内を旅行する。1897年には呉汝綸の蓮池書院に入門し、1898年から1899年にかけて、張之洞が日本陸軍の福島安正大佐に委託した中国人留学生の教育に当たった。1900年には四川東文学堂で教習（教師）として勤務し、義和団事件の影響で帰国した。その際に北京の惨状に衝撃を受けたことをきっかけに、師である呉汝綸と中国人のために新教育を施す北京東文学社を設立（1901年3月）した。主な後援者は李鴻章や川島浪速、嘉納治五郎などで、中島の役職は総教習であった。北京東文学社は中国人学生に対して、漢文訳した日本の書籍で近代知識と日本語の教育を、基本的には資格不問・無料で行い、同時に中国大陸で活動する日本人向けの中国語教育も行った。袁世凱の下に移行される1906年までに、両者を併せた学生数は合計1,600-1,800名に達したが、その成果と意義については、清末の北京で、中国の新知識人養成に多大な貢献をしたとする見方と、いわゆる支那通の軍人や大陸浪人を育成した以外の成果を挙げなかったとする見方とがあり、評価が分かれている。

参考文献

佐藤三郎「中島裁之の北京東文学社について」『山形大学紀要(人文科学)』第7巻第2号、1970年
劉建雲「清末の北京東文学社・教育機関としての再検討」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』
第11号、2001年

l) 嘉納治五郎【かのう じごろう】(1860-1938) と弘文学院

嘉納治五郎は、弘文学院の創設者である。一般的には講道館柔道の創設者として有名である。また教育者でもあり、ラフカディオ・ハーンが教員として在職した時代に旧制五高（熊本）の校長を務めたほか、学習院教頭、東京高等師範学校校長などを歴任したほか、井上圓了が設立した哲学館（後の東洋大学）で講師を務めた。弘文学院は1902年に東京で設立された中国人留学生受け入れのための学校。主要な卒業生には新文化運動をリードし、中国共産党の設立者の一人となった陳独秀や、20世紀中国を代表する文学者の魯迅がいる。

m) 黎明会と新人会

黎明会は吉野作造を中心とする民本主義の知識人団体で、普通選挙の実施や治安警察法の廃止を主張し、また、三一独立運動や五四運動を擁護した。新人会は吉野を顧問とし、東京帝大の日本人学生を中心に朝鮮人・中国人学生をメンバーに含んだ学生団体である。会員の多くがキリスト教徒であったため、神田の中華留日基督教青年会及び彼らが運営する神田の中国青年会館を媒介に、中国・朝鮮の留学生コミュニティと密接な関係を持っていた。当時のメンバーが以下のように回想している。

基督教青年会と新人会とのメンバーには多くのパーソナルユニオンが行はれて、ために一時は、青年会が新人会の根拠地のやうになつたのも、自然の勢であつた。——所謂学究的分子や留学生的分子と青年会との関係に就きては稍同じことが言へる。(中略)。だから先生の周囲のものを、種々に色分けして見ても、それ等のものには重なり合ふものが少なくなかつた。

(河村又介「吉野先生と社會思想」赤松克麿編『故吉野博士を語る』1934年、76-9頁)
東京におけるアジア各国の民族主義運動にとって、結節点として作用しており、本年表中の宮崎龍介の訪中と、脚注で触れた北京大学学生団の訪日も、新人会の手配によるものである。このほかにも、植民地学者の矢内原忠雄と台湾からの留学生である葉榮鐘とが深い師弟関係を結んだ(葉榮鐘「矢内原先生與我」61-78頁)ように、無教会派も含めて、この時期の東アジア全体の文化交流にキリスト教系知識人の人脈が果たした役割は、あまり知られていない。

参考文献

松尾尊兌『大正デモクラシー』岩波現代文庫、2001年
ヘンリー・スミス著、松尾尊兌・森史子訳『新人会の研究——日本学生運動の源流』東京大学出

版会、1978 年

河村又介「吉野先生と社會思想」赤松克麿編『故吉野博士を語る』1934 年、76-9 頁

葉榮鐘「矢内原先生與我」『台湾人物群像』帕米爾書店、1985 年

4. 参考文献一覧

a) 全般に関する参考文献（種類順）

王曉秋『近代中日啓示録』北京出版社、1987 年

京大東洋史辞典編纂会編『新編東洋史辞典』東京創元社、1980 年

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、1992 年

新聞集成明治編年史編纂会編『新聞集成明治編年史』林泉社、1936 年

瀋渭濱主編『中国歴史大事年表・近代巻』上海辞書出版社、1999 年

市古貞次・久保田淳編『日本文学大年表（新版）』おうふう、2004 年

国立国会図書館 OPAC (<http://opac.ndl.go.jp/>)

中国国家図書館 OPAC (<http://www.nlc.gov.cn/>)

東洋文庫漢籍オンライン検索 (<http://61.197.194.10/TBDB/KansekiQuery3.html>)

森末義彰・市古貞次・堤精二編『補訂版 国書総目録』岩波書店、1990 年

国文学研究資料館日本古典籍総合目録（『国書総目録』の増補、訂正版、<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）

b) 個別の参考文献（年表に登場した時代順）

佐藤三郎『中国人の見た明治日本 東遊日記の研究』東方書店、2003 年

新村出監修『海表叢書』三巻、更生閣、1927-8 年

春名徹『につぼん音吉漂流記』晶文社、1979 年

羅森著、野原四郎訳「ペリー随伴記」岡田章雄編『外国人の見た日本 2——幕末・維新』筑摩書房、1961 年

サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ著、洞富雄訳『ペリー日本遠征随記』新異国叢書 8、雄松堂書店、1970 年

維新史学会編『幕末維新外交史料集成』第 3 巻、財政経済学会、1942-4 年

吉田松陰著、山口県教育会編『吉田松陰全集』第 9 巻、大和書房、1974 年

J. W. スポルディング著、島田孝右訳『日本遠征記』新異国叢書、第Ⅲ輯 4、雄松堂出版、2002 年

ベルリ著、土屋喬雄・玉城肇共訳『ベルリ提督日本遠征記 (2)』岩波文庫、1948 年

王曉秋著、木田知生訳『中日文化交流史話』日本エディタースクール出版部、2002 年

さねとうけいしゅう『大河内文書——明治日中文化人の交流』東洋文庫 18、平凡社、1964 年

卓南正『中国近代新聞成立史——1815～1874——』ペリかん社、1990 年

- 西里喜行『清末中琉日関係史の研究』京都大学出版会、2005年
- 黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩』東洋文庫 111、平凡社、1968年
- 彭沢周『中国の近代化と明治維新』同朋舎出版部、1976年
- 佐藤保「黄遵憲と日本」伊藤虎丸ほか編『近代文学における中国と日本：共同研究・日中文学交流史』汲古書院、1986年
- 張偉雄『文人外交官の明治日本—中国初代駐日公使団の異文化体験—』柏書房、1999年
- Joseph Richmond Levenson, *Liang Chi-chao and the Mind of Modern China*, Second Edition, Thames and Hudson, 1959.
- 狭間直樹編『共同研究 梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年
- 古澤誠一郎『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国を見る—』岩波書店、2003年
- 潘佩珠「潘佩珠自判」内海三八郎『潘佩珠伝——日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯——』芙蓉書房出版、1999年
- 呉天任編『民国梁任公先生啓超年譜』第二冊、台湾商務印書館、1988年
- 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東京大学出版会、1978年
- 実藤恵秀「姚文棟ものがたり」『明治日支文化交渉』光風館、1943年
- 関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、1997年
- 趙鉄寒編『文廷式全集』大華印書館、1969年
- 孔健『中国新聞史の源流——孫文と辛亥革命を読む』批評社、1994年
- 島田虎次「章炳麟について」『中国革命の先駆者たち』筑摩書房、1965年
- 汪向榮著、竹内実ほか訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社、1991年
- 藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』大明堂、2000年
- 相原茂樹「近衛篤磨と支那保全論」岡本幸治編著『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、1998年
- 佐藤三郎「中島裁之の北京東文学社について」『山形大学紀要（人文科学）』第7巻第2号、1970年
- 劉建雲「清末の北京東文学社・教育機関としての再検討」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第11号、2001年
- 伊地知善継・山口一郎監修『孫文選集』第3巻、社会思想社、1989年
- 康有為撰、姜義華・張榮華編校『康有為全集』第3巻、中国人民大学出版社、2007年
- 幸徳秋水『幸徳秋水全集』3、明治文献、1968年
- 宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第1巻、平凡社、1971年
- 法政大学『法政大学百年史』法政大学、1980年
- さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、1970年
- 成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書新赤版 1045、岩波書店、2007年
- 周恩来著、矢吹晋編、鈴木博訳『周恩来『十九歳の東京日記』』小学館文庫、小学館、1999年

さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981 年

松尾尊兌『大正デモクラシー』岩波現代文庫、岩波書店、2001 年

ヘンリー・スミス著、松尾尊兌・森史子訳『新人会の研究——日本学生運動の源流』東京大学出版会、1978 年

河村又介「吉野先生と社會思想」赤松克麿編『故吉野博士を語る』中央公論社、1934 年

葉栄鐘「矢内原先生与我」『台湾人物群像』帕米爾書店、1985 年

吉野作造著、松尾尊兌編『中国・朝鮮論』東洋文庫 161、平凡社、1970 年

吉野作造『吉野作造選集』14（日記 2）、岩波書店、1996 年